

# 相談室だより (みさき・くろさき 2008年5月)

担当：みさき病院 MSW 緒方

今年も、ツバメ達がみさき病院に巣を作り、新しい命が誕生しています。もうすぐ巣立ちの時期を迎えるところです。ツバメ達を見ていると、「毎年、同じ時期に同じ場所に巣を作り、子育てをする。毎年毎年、変わらない、これはすごいことだなあ」と感心してしまいます。

一方、今の日本は、「毎年毎年、生活が苦しくなる」というのが実感ではないでしょうか？今月は、「貧困」「生活保護」に関係する出張や集会に参加してきましたので、その内容を中心に皆さまにお知らせしたいと思います。

## 「どうなる生活保護、～老齢加算廃止に対する厚生労働省交渉を実施～」

昨年、民医連 SW 委員会では、しかし、2004年度から減額、2006年度に廃止された70歳以上の老齢加算が廃止の影響を約400名の方に調査しました。この加算の廃止で、約2割の保護費カットとなっています(大牟田で1人暮らしの女性・75歳を例に取ると、月額保護費は2004年度までは、老齢加算の16,830円があったので、82,700円でした。現在は、この加算の廃止のため、月額：65,870円です)。

この影響は、私たち SW の想像を超えて、悲惨なものでした。人間の生活の基本である「衣食住」の保障はおろか、人間関係の構築すら出来ない方が大勢いらっしゃったのです。加算廃止の影響で、とにかく食費を切り詰め「月末になると食事を1食にする」「空腹時は水を飲むようにしている」等の悲惨な食事実態、「町内会を脱会した」「知人との付き合いはお金がかかるので少なくしている」等、「貧困＝孤立」と思わざる得ない声もありました。

これらの調査をまとめ、4月23日、厚生労働省に交渉をしてきました。メンバーは、全日本 SW 委員を中心に11名、厚生労働省側は2名でした。要請に対しては「一般低所得世帯との比較で、生活保護の基準が高かった」と、いつもの答弁に終止。私たちが調査を通し明らかにしてきた「節約ややりくりを通りこし我慢」している実態という見解に対し、「一般低所得世帯の食費は月2万円。自分も学生時代を思い出すと月2万円の食費で生活できるはず」「特売や半額セールに行く事は惨めではない」など、朝日訴訟での国側の証言の再現かと思わせるような、権利としての生活保護とは全くかけ離れた発言に、はらわたが煮えくり返る思いでした。

老齢加算の廃止に対しても「時代、時代で最低生活水準は変わる。今は老齢加算が必要な特別な事情は認められない。現行の生活扶助で最低生活は保障されている」と断言。生活保護基準以下で生活している人が多数存在することに対しても「生活保護基

準が貧困ラインを決めているとは考えていない」と、真っ向からわたしたちの意見と全く相反する状況でした。

この「老齢加算廃止」の背景には、小泉政権下の骨太方針「社会保障の削減」があります。具体的には、毎年、社会保障費を2200億削減することです。これは、生活保護だけでなく医療・福祉・介護等あらゆる分野での切り下げです。療養病床の削減・後期高齢者制度、生活扶助基準の切り下げなどです。

しかし、この間の私たち・国民の運動で、国も「予定通り」には行かなくなってきています。後期高齢者医療制度は国民の大きな反感を買い、制度の見直しの連続、つい先日には、療養病床の削減目標の修正など、目に見える形で、国民側が押し返しています！

「学べ」ば、「運動」に繋がる。「運動」をすれば変わる！時代になってきたのではないのでしょうか？

